

司式：佃 雅之
奏楽：堀口 恵美

前奏：「イエス・キリストよ、汝を崇めまつらん」(G. ベーム)

招詞：城門よ、頭を上げよ、とこしえの門よ、身を起こせ。栄光に輝く王が来られる。栄光に輝く王とは誰か。万軍の主、主こそ栄光に輝く王。(詩24:9-10)

讃美歌：20「主に向かってよこび歌おう」

交読：詩編 8篇

- 01 【指揮者によって。ギテイトに/合わせて。賛歌。ダビデの詩。】
02 主よ、わたしたちの主よ、あなたの御名は、いかに、全地に満ちていることでしょう。天に輝くあなたの威光をたたえます
03 幼子、乳飲み子の口によって。あなたは刃向かう者に向かって岩を築き、報復する敵を絶ち滅ぼされます。
04 あなたの天を、あなたの指の業を、わたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの。
05 そのあなたが御心に留めてくださるとは、人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう。あなたが顧みてくださるとは。
06 神に僅かに劣るものとして人を造り、なお、栄光と威光を冠としていただけ
07 御手によって造られたものをすべて治めるように、その足もとに置かれました。
08 羊も牛も、野の獣も
09 空の鳥、海の魚、海路を渡るものも。
10 主よ、わたしたちの主よ、あなたの御名は、いかに力強く、全地に満ちていることでしょう。

朗読聖書①詩編 43:5

43:5 なぜうなだれるのか、わたしの魂よ/なぜ呻くのか。神を待ち望め。わたしはなお、告白しよう/「御顔こそ、わたしの救い」と。わたしの神よ。

朗読聖書②ルカによる福音書 12:22-32

◆思い悩むな

- 22 それから、イエスは弟子たちに言われた。「だから、言うておく。命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思悩むな。
23 命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ。
24 鳥のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが、神は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりもどれほど価値があることか。
25 あなたがたのうちのだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかも延ばすことができようか。
26 こんなごく小さな事さえできないのに、なぜ、ほかの事まで思い悩むのか。
27 野原の花がどのように育つかを考えてみなさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。
28 今日は野にあって、明日は畑に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。信仰の薄い者たちよ。
29 あなたがたも、何を食べようか、何を飲もうかと考えてはならない。また、思い悩むな。
30 それはみな、世の異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである。
31 ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。
32 小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。

私たちの命の源であるの神さま。あなたの憐れみに満ちた聖なる聖名を心から褒め称えます。神さま、あなたは今日も、私たちを礼拝へと招き、教会に、またライブ配信によって一つの群れとして集めてくださいました。あなたの御前に出て、共に礼拝を献げることのできる幸を心から感謝致します。

教会は、待降節第三主日を迎え、主の到来の近きを覚えます。主が、すでにお出でになり、私たちの内に住み生きてくださっていると共に、私たちは救い主の再び来られることを待ち望んでいます。どうか、クリスマス待ち望む私たちの歩みがあなたに守られて、あなたへと真直ぐに進みゆく日々でありますように。そのために私たちが、あなたと隣人を愛する心を忘れることがありませんように、上よりの導きを切にお願い致します。教会に連なる全ての人と共に、主が来られることを喜び祝うことができますように、この朝、私たちに御言葉をください。あなたが直接、私たちに語りかけてくださり、私たちが悔い改める者としてください。“キリスト・イエスを主”と告白し、あなたの光の内に生きる者とさせてください。

万物の創造者であり真の支配者である神さま。この地上に平和を来らせてください。主よ、あなたの光は闇の中に輝きます。けれども主よ、今、世界には、戦争や暴力が絶えず、私たちの国においても、孤独や分断、貧困、そして将来への深い不安が広がっています。更にまた、東北地方を中心に大きな地震が起こりました。森林火災も続いています。この地上は、今、痛みと嘆きの声が充ちています。主よ、どうか、あなたの平和と慰めをこの世界にお与えください。あなたの御声が、この地に溢れ、嘆きと混乱の只中にあっても、人々が、あなたの導きを聞き取ることができますように。私たちの祈りを強め、あなたの平和と真理を証しする者として用いてください。

教会の頭である主よ、信濃町教会の福音伝道の歩みを導いてください。私たちの伝道のための諸活動が、あなたに喜ばれるものとなりますように。特に、クリスマスの備えをしている兄弟姉妹を、あなたが強めてください。また、教会学校の働きを祝し、小さな子供たちに至るまで、その体の健康を守り、蒔かれた福音の種が、確かなものとして育まれていきますようにお導きください。

神さま、様々な事情で、この場の礼拝を共にできない兄弟姉妹のことを覚えて祈ります。今、深い悲しみの中を歩む友がいます。重い悩みの中で教会から足が遠のいている友もおります。また、病床にある友、そしてその病床に寄り添うために、この礼拝に加わることができない友もいます。主よ、どうか、彼らの傍に臨んでいてください。聖霊の力によって守り励まし、慰め、再び立ち上がることができるようにしてください。

神さま、今朝、この教会の礼拝に説教者を与えてくださったことを感謝致します。笠原義久牧師が聖霊の豊かな導きを受けて、あなたの福音の恵みと真理を力強く語ることができますように。また、その語る言葉を聞く私たちも、一人ひとりに深く届き、信仰を新たにし、あなたに従う力となりますように、あなたの助けを求めます。

これらの祈りを主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌 235「久しく待ちにし」

先程お読みいただいた ルカ 12:12-32、これが今朝、ここに集められている私たちに与えられた御言葉です。特に 32 節

小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。

主は弟子たちに言われます。「思い悩むな。何を食べようか、何を着ようか、衣食住のことで思い悩むな。自分の命のこと、自分の体のことで思い悩むな。」“自分がその存在、その実存において否応なしに抱え込んでいる重い課題、自からの生き方、キリストの弟子としての使命の果たし方、そういうことで思い悩むな。”

「思い悩む」ということは結局、“或る事に対して自分が最後の責任を負わなければならないと思ひ定めること、その事に対して自分が、自分こそ最後の結末をつけない限りはならないと思ひ込むこと”、「思い悩む」とは、そういうことであろうかと思ひます。

「思い悩むな」、「あなた方は天の父がおられること、父である神が生きて働いておられること、この事実を、このわたし・イエスにおいてあなた方は見ているではないか。父である神が、このわたし・イエスにおいて働いておられる、その事実をあなた方は知っているはずだ。だからあなた方はもはや思い悩まなくてよいのだ。思い悩む必要はない。いや思い悩むではない。そうではなくて、思い悩みから解かれた者として、解放された者として神の国を求めなさい。神の国を求めることによって思い悩みから解かれなさい。」主はそのように仰っています。しかし弟子たちは、彼らが真面目で、熱心で、御言葉と自分の務めに忠実であろうとするだけ、それだけ、“ただ神の国を求めよ”ということが彼らの思い悩みとなっていたのではないのでしょうか。

“ただ神の国を求めよ”、主のこの言葉を聞いて弟子たちは、それが“自分たちの栄光ある課題、自分たちの基本的な使命、自分たちが決して忘れてはならない務め”、そのように彼らは思い定めたのでしょう。そのようにして、“ただ神の国を求めよ”ということが弟子たちの思い悩みとなっていた。

今申し上げたような弟子の在り様というものが、実際のところ、それが私たちの実の姿と言えないでしょうか。神の国を求めるといことが私たちの思い悩みとなっている、負担となっている。そのような私たちの在り様というもの、そのことを主イエスはご覧になっている。そして弟子たちを、そしてまた私たちを、そのように主イエスはご覧になっているのではないかと、そのように思ひます。

さて、並行箇所であるマタイ福音書『山上の説教』の箇所とは異なり、ルカ福音書は 31 節「ただ神の国を求めなさい」という御言葉に続けて、独自に 32 節「あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。」付け加えています。この 31 節と 32 節の間に、私たちは何を讀むことが出来るのでしょうか。あるいは何を讀むようにと求められているのでしょうか。

32 節の「恐れ」という言葉が、この二つの節の間を繋いでいます。ただ神の国を求めることが弟子たちにとって恐れであり、思い悩みとなっていた、そのような弟子たちに主イエスは、「恐れるな、恐れる必要はない、恐れるのを止めよ」、そのように語っておられるのではないのでしょうか。

この「神の国を求めよ」ということが、「ただ」《πλὴν(πλην) [むしろ、まだ]》という小さい言葉で限定されています。必要不可欠なことを、それも排他的に語ろうとしている、それが「ただ」、「ただこの一事が大切なのだ」、そのように語ろうとしています。

主イエスはここで、弟子たちの唯一根本の務めを「神の国を求めよ」という言葉で語っています。教会における様々な奉仕の業、その務め自体が、また

それらの務めに関するあれこれのことが思い悩みとなっている。そしてその務めを負う自分という存在、実存が悩みとなり恐れとなっている。限界や敗れをどうしようもなく負っている自分自身が、また罪の力に絡め取られている自分自身が、曲がりなりにもそういう自覚の中で自分自身が思い悩みとなり恐れとなっている。外にどう表れているのか、そのこととは別に、この恐れに自分は捉えられている、そのように私たちは思っているのではないのでしょうか。

主はそのような私たちに語られます。「恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」と。「恐れるな」、主は私たちが“恐れの中にある者、恐れている者”、そのように見ておられます。“私たちが、また私たちの教会が、世に置かれている神の民が、恐れの内にある”と、そのように主は見ておられる。

この「恐れるな」という言葉は、ルカ福音書に何回も語られています。そしてこのルカ福音書の特徴の一つになっていると言ってもよいと思ひます。例えば、イエスの母マリアがイエスを胎に宿した時、天の使いはマリアに「恐れることはない。あなたは神から恵みを頂いた(1:30)」と語りかけました。あの最初のクリスマスの夜、野宿をして羊の群れの番をしていた羊飼いたちに主の天使は告げました。「恐れるな。わたしは民全体に与えられる大きな喜びを告げる(2:10)」と。

「恐れるな」、元の言葉《Μὴ φοβοῦ(Μη·φοβου)=not fear》では、ある継続している動作や事態を止めさせる、ストップさせる、そういう動詞の用いられ方がされていますから、「恐れるな」というのは、“恐れるのを止めよ!”というニュアンスが強いと思ひます。弟子たちも、マリアも、そして羊飼いたちも既に「恐れていた、恐れに捕らえられていた」。「恐れるのを止めよ」、「もう恐れ続ける必要はない」、そのように語りかけられているのです。

この福音書の記者であるルカは、またこの福音書の背後にあった教会は、“特別に重く、繰り返しこの御言葉を聞き、この御言葉に励まされ、そしてこの御言葉に生かされて”、そういうことだと思ひます。神への恐れがあったのでしょうか。と同時に、圧倒的なローマ帝国と、そしてヘレニズム文化の中にあつて周辺世界とは異質の小さな群れとしての恐れもあったと思ひます。私自身、「恐れるな」という御言葉によって自らを見ると、自分の内外にうしろそとに多くの恐れを抱え込んでいるか、そのことを思わざるを得ません。人を恐れ、己を恐れ、聖なる神を恐れている。形は違っても、私たち皆それぞれに恐れを抱え込んでいる。そのような私たちに、それぞれに務めを負う教会に、世にある神の民に、主は“小さな群れよ、あなた方、もう恐れ続けるのを止めよ”と、そのように語り、命じておられるのではないのでしょうか。

では何故、恐れる必要はないのか。何故、思い悩まないでよいのか。“あなたがたの父は喜んで神の国を下さる、神の国を下さる、神が御子キリストにおいてその恵みのご支配を為される”、その事実、その喜び、その平安にあなた方を与らせて下さる、あなた方がその神の国の世継ぎとされる、それがあなた方の天の父のご意志である。天の父は“それがよい”と、そのように決心しておられる。“そのことを喜び”としておられる。そしてそのことは天において既に為された天の父の決断なのだ。この“父の決断、御子キリストにおいて実現される父である神の決断、この決断に対抗し、この決断を覆し、この決断を虚しくするもの、することは何一つとしてありはしない。あなた方は自分のことを能力に乏しい、働きが小さい、破れ多き者だ”とそのように言う。“あなた方の罪がどうしようもなくあなたがたを縛っている、サタンがあなた方を支配している、そのようにあなた方は言うのか。確かにそうであろう。そういうあなた方の悩みをわたしは知っている。しかしそれらがどのように強い

力に見えようとも、それらは一時的であり、そしてまた表面的なものに過ぎない。それらが最後の勝利を自分のものとするのではない。最後になるのは、あの父である神のご決断なのだ。神の一貫したご意志なのだ。イエス・キリストにおける神の勝利こそが最後究極の現実なのだ。あなた方は既にその神の決断の中に置かれている、イエス・キリストにおける神の御決断の中に置かれている。だからもう恐れるのを止めよ、思い悩むのを止めよ”と、そのように語られているのではないのでしょうか。

夕暮れのように展望がなく、救いなく、喜びがない。それが今の時代を深く覆っている私たちの状況です。しかし、いま切に待ち望むクリスマス、私たちは確信をもって言わなければなりません。“神は、私たちがどうなってもかまわない。私たちと関わりなくあろうとされるそういう御方では決してない”と。むしろ神は私たちを存在へと至らせ、重んじ、活かし、私たちをご自分のパートナーとして立て、そして用いてくださる。神は私たちと軛を共にされると。

主のご降誕を待ち望む時の中、真闇の荒野で「恐れるのを止めよ」という御使いの声を聞いて、心を打ち震わせた羊飼いのように、私たちも同じ、“恐れるのを止めよ”と、その御声を聴く者として、この時の経過の中に、しっかりと身を置きたいと、そのように願うものであります。お祈りします。

神さま、あなたの贈り物としての御子キリストをお受けするため、もう一度、心一つにして準備しようとしているこの時、どうかあなたご自身が私たちの間に居まし給いますように。

あなたが私たち全てに対しあらかじめ計画され、私たち全てのために既に成し遂げられたことを、感謝に充ちた驚きをもって受け取る備えをあなたご自身がお造りくださいますように。

主キリストの聖名によって祈ります。アーメン

讚美歌 231「久しく待ちにし」

献金・感謝・主の祈り(吉田千鶴子)

ご在天の父なる神さま。あなたの聖名を賛美します。今朝は、一人ひとりの名を呼び集めてくださり、ライブ配信での兄弟姉妹と共に、アドヴェント第三主日の礼拝に与ることができ、礼拝をお献げすることができましたことを心より感謝致します。

過ぐる週日、あなたの御言葉に背くことが多かった私たちをお赦しくください。このような私たちに、あなたはあなたのご決断の中に置いてくださり、“小さな群れを恐れるな！”と、今日また新しい御言葉をお示しく下さいました。恵み深いあなたの溢れる愛に感謝致します。示された御言葉を糧に、この次の週日も過ごすことができるように、聖霊の導きとあなたのお守りを祈り求めます。

本日、この礼拝を覚えながら、ここに集い得ない兄弟姉妹、また、あなたの助けを必要とされている方々に等しく、あなたの福音が告げ知らされますように願います。

只今、あなたから与えられた物の中から献身の徴として、一部を御前にお献げ致しました。どうぞ、あなたの御用意のために、祝してこれを用いてください。

あなたが私たちにお教えました『主の祈り』をもって、この週の歩みを始めさせてください。…『主の祈り』アーメン。

派遣：讚美歌 92「主よ、わたしたちの主よ」

祝福：主イエス・キリストの恵みと、神の愛と、聖霊の交わりとが、あなた方一同と共にあるように。アーメン。

報告：①週報記載外の委員会：(1)財務・管理委合同(書記の会后、小礼拝堂)、(2)オルガン調律(午後1時)。②(1)礼拝委・伝道委：お詫び、教会クリスマス案内「はがき」文言訂正(24日火を氷に)。クリスマス祝会会費¥1,000(食事代)。③社会委：献品要請案内。④支援特別委：「通信」発行案内。(4)100周年記念出版物2点次週配布予定の案内。(5)支援特別委・諸教会連帯資金運営委：ミニバザー案内

後奏：「イエス・キリストよ、汝を崇めまつらん」(J.S.バッハ)

